

【小説部門・優秀賞】

追悼

私立同志社高等学校 第2学年 高田 藍

世間を賑わせた台風は一昨日のうちに温帯低気圧に変わり、雨も上がった。台風一過の晴れの朝。なのに雲はまだ分厚いまま。耳にさしたイヤホンが絡まる。突如吹いた強い風が短めの髪の毛を揺らした。

近くのホームセンターに寄って、花を二束買う。レジの店員の声が聞こえなくて、イヤホンの音量を三つ下げた。店員の日に焼けていない、白い指先を見ながら答える。

「あの、レジ袋は」

「結構です」

つい数ヶ月前に有料化したレジ袋は、店員と客の面倒な手間を増やしただけ。奪い去るように二つ。小ぶりの花束を受け取って店を出た。

また歩き始める。風が止んで、日が強く刺差した。もう夏も終わる頃だというのに、しぶとく残った夏の残骸が肌を焼く。じわりと汗が滲んだ。途端、鳴り出した蝉の音がうるさくて、音量を四つ上げた。

ホームセンターから数百メートル先にあるラーメン屋の角を曲がって、神社の前を通り過ぎる。十二時五分。かなり歩いた。家を出たのは、えっと、何時だっけ？

閑静な住宅街に入って、右に曲がって坂を上る。中々の急勾配で、普段運動なんてしないから、すぐに息が切れてしまった。

下を向き、膝に手をつけて、額の汗を拭う。揺らいだ陽炎に、いつかの記憶が重なった。

あの日も、こんな風に暑い夏だった。今よりも少し蒸し暑かった気もするけれど、むわりとした夏の空気が私を蝕んでいた。

「死んじゃったんだよね、お父さん」

揺らぐ陽炎越しに、彼女の目を見た。死を告げるにはあまりにあっけらかんとした目だった。

「九年も前の話だけど」

だからそんな顔をしないでよ、と彼女は告げる。どんな顔をしていたのだろうか。気になってぺたぺたと頬に触れると、彼女はカラカラと笑った。

「へんなの」

「変じゃないよ、別に」

私たちは急な坂道を歩きだした。その話を聞いて私は、この先に何かあるかを悟った。

普段から運動のしない私と違って、バレー部に属している彼女は軽々と坂を上っていった。おいてくよ、だなんて彼女が言うから私は、かわいた喉の奥から待ってよ、と声を絞

り出した。

前を進む彼女は、ぴょこんとはねたポニーテールを揺らしてこちらに振り向いた。どんな顔をしていたのだろう。夏の日差しと、彼女自身の放つ強い煌めきが私の視界を邪魔した。

学校指定のスカートは分厚くて、暑さを倍増させる。失敗したな、着替えて来れば良かった。これも、何も告げずに連れ出した彼女が悪いのだ。知っていたら、来なかったのに。

「もう、鈍いんだから」

「うるさいなあ」

それもこれも、全部お前のせいだ。そう言いそうになって口を噤む。はしゃぐ彼女の姿は、父親を亡くした悲しみとは無縁のものだった。

記憶を辿りながらも乱れた息を整えて、また歩き出した。膝が軋む。前屈みで歩き続けているせいか、腰にじわじわと痛みが広がっていく。やだなあ、これじゃおばあちゃんみたいじゃないか。

道路に浮かぶ白線が目を焼いた。夏特有の厳しい日差しを照り返している。乾いたアスファルトは何処までも私を苦しめた。

目的地は普段住んでいる街が見渡せる、小高い山の斜面に位置していた。となりには、一般にそうであるように寺があり、どこか物憂げな空気を孕んでいた。

彼女の父親の法事もここで行われたのだとあの時聞いた。それと同じように、この墓地に入った死人は皆、この寺で供養されたのだろう。

この先の駐車場の向こう側。五段しかない石段を降り、駐車場側から数えて五列、右から三つ。そこに位置している墓石が、最終の目的地だ。

ようやく一歩手前の駐車場に到着して、うんと伸びをした。とりえず両手を塞いでいた荷物をアスファルトの上に置く。墓石に行く前にお参りの準備をしなければならない。…まあ、スマホと財布、途中で買った花しか持っていなかったのだけれど。

ご自由にお使いくださいとの立て札を横目で確認して、備え付けのバケツを取った。蛇口を捻って水を貯めると、冷たい水が跳ねて足にかかった。

「ほら、着いたよ」

ようやくか、と私は顔を上げた。思った通り、そこは墓地だった。生活感とはかけ離れたそこに、となりの寺に置いてあるミニバンが異質な雰囲気醸し出していた。

「ここのお寺でやってもうらうんだよね。色々」

「色々？」

「そう、色々。法事とか」

そう話した彼女は、やはりどこか楽しそうで、私の中の『父を亡くした可哀そうな少女』のイメージとはかけ離れていた。

先に坂を上りきった彼女は、サビの付いたバケツと柄杓を取って、水を汲んでいた。

「……え、何してんの」

「何って、お水。いるでしょ」

「そうなの？」

「お墓参りしたことないの？」

したことがないことはない。ないことは無いが、いつも任せきりだった。母が線香やしきみの準備をしている間、父が汗を拭いながら草むしりをしていたのは覚えている。

彼女の家族はどうしていたのだろうか。うちでは重労働は専ら、父の役目だったから。墓の周りは雑草だらけで、手入れされた様子はなかった。

彼女は墓石に水をかけた。周囲の空気が水を含んで、広がった。日差しにやられた水道水はお世辞にも冷たいとは言えなかった。

水道水と同様に日差しに頭をやられたらしい私は呆然と周囲を見ていた。お盆の時期とは少し離れているからか、人の気配は無い。随分と濃くなった山の緑が、陽炎に揺れていた。

突然隣からレジ袋のガシャガシャという音が聞こえて、現実には引き戻される。

「え、何。うるさい」

「うるさいって何が」

「レジ袋」

「そのくらい許しなよ」

彼女は持っていたレジ袋の中から物を取りだして墓前の石段に並べた。ロウソク。マッチ。線香。軍手。それと、小ぶりの花束をひとつ。

「昔流行ったよね、マイバッグ」

「流行ったっけ？」

「流行ったよ、風呂敷とか」

彼女は私に背を向けて花束をふたつに分けていた。私は何をどうすればいいか分からず、手伝うのもどうかと思って、ただ待っていた。

「別にレジ袋ぐらい貰っとけばいいのにね」

「それ言っちゃおしまいだよ」

なんか環境に悪いんだってさ、と彼女は可笑しそうに笑う。

私は周囲を見渡して、違和感に気づいた。彼女の用意した花束は他と比べて些か、

「……派手すぎない？」

「そう？地味よりいいでしょ」

知らないけど、と彼女は続ける。会話の間にも彼女は手慣れた様子で花を活けてマッチを摩ってロウソクに火をつけ、それを線香に移していた。墓前に手を合わせた彼女に、ようやく私は焦り始めた。

「ちょっと待ってよ。私もした方がいいんじゃないの、なんか」

「だってあんたの親戚じゃないでしょ？」

「そうけど、」

「赤の他人だって」

彼女の声はあまり淡泊で私を驚かせた。今まで墓参りに非協力的であったとは言え、私にも人並みの倫理観や常識というものは備わっている。彼女の回答と今まで見てきた手慣れた様子はミスマッチかのように思えたのだ。

「まあ、いいんだけどさ。なんでも」

「あれ？あんまり興味無い？わたしのこと」

「なんでそうなるの」

「なんでもいいっていま言ったじゃん」

「……ほんとさ、あんたって」

めんどくさい。

ポツリと呟いた私のことばだけが、宙に残った。それがただ吐き出されただけの、見掛け倒しの返信であることに、彼女は気づいたのだろうか。

彼女は私に背を向けたままこちらを見ようとはしなかった。じっと、墓石の方を見つめていた。

あまりにずっと見ているものだから、墓石の向こう側に何かあるのかもしれないと思って、私も向こうへ目を向けた。しかしそこにあるのは綺麗に整列する墓石と、山が倒れて出来たと思われる崖だけ。

静かだった。辺りは不気味に静かだった。蝉の声だけが、うるさく木々の間から聞こえた。

どのくらいそうしていただろうか。突如彼女は振り返ってこちらに何かを突き出した。

「はい、これあげる」

「軍手？なにこれ」

「軍手だよ」

「知ってるよ。そうじゃなくて」

私が説明を求めれば、彼女は誠に楽しそうにくすくすと笑った。幼いその仕草を睨みつけると、ごめんごめんと笑い混じりの謝罪が聞こえた。

「ごめんなさいって思っただけでしょ」

「思ってるよ。ただちょっと面白かっただけで」

「それで？何したらいいの」

「雑草をね、抜いて欲しいの。ひとりじゃ大変だから。」

そう言うと彼女は軍手をはめて、墓前にしゃがんだ。反論の余地はないらしい。多少の面倒を感じながらも私も彼女をまねて隣に座り込む。

黙々と雑草を抜いていく。そんな時間にまともに耐えられるはずもなく、そっと隣を伺った。

いつもと違って彼女は、感情の読めない真っ黒な瞳をしていた。普段はキラキラと光が反射して眩しいくらいの彼女の瞳は、同じく真っ黒な彼女の前髪の影となって光を失っていた。

夏の光は背中をきつくさして、容赦なく体力を奪ってゆく。遮るものも何も無い墓地のど真ん中。私たち以外、誰もいなかった。

その時、彼女の額から汗がひとすじ、流れていくのを見た。

汗はこめかみを通して、彼女の白く柔らかそうな、健康的に膨らんだ頬を経てから、きゅっとしまった顎へたどり着く。その様子からなぜか、目が離せなかった。

「なに見てんの？」

突然聞こえた彼女の声。どきりと胸がなった。それはいたずらがバレた時のような、ある種の緊張を孕んでいた。

「べつに」

「ふーん、そう」

焦り。私のなかにうまれた感情はおそらくそれだった。どうしてそんな感情を持ったのか、私にはわからなかった。できれば理解など、したくなかった。

「もしかしてさ、見惚れてた？」

「馬鹿じゃないの」

彼女はまたいつものように笑った。白い歯をみせて、けれどどこか控えめに。肩を揺らすさまは普段の明るくうるさい彼女の様子とは少し違っていた。

ひとしきり笑って気が済んだのか、彼女はひとつ深呼吸をした。私はくっと身構える。彼女が深呼吸をすると、決まって私にとって都合の悪いことが起きる。それは彼女と過ごしている中で気づいたことだ。

おそらく、ほかの人よりも。長く。深く。

私の心中を知ってか知らずか、彼女はふわりと笑ってこちらをみる。

「……なに見てんの」

「うーん、見惚れてたかも？」

「冗談きつい」

「ごめんって」

目線だけではやく言えと催促する。

「私たちってさ、ともだち？」

彼女の真っ黒な瞳がこちらを見つめる。聞かなければよかった。はやくも私は、先ほどの己の行いを後悔していた。

彼女は私とは対極にいる人間だ。全てが正反対で、彼女の全てが理解不能だった。

根暗だと言われがちな私にも、根暗だと言ってくれるくらいの友人は居る。ただ、彼女を普通の友人と呼ぶにはどこか違う気がしたのだ。

そっと彼女から目を背ける。彼女の問いにまっすぐに向き合うような強さを持ち合わせ

てはいなかった。

鳴りやまない蝉時雨が、私たちを包んでいた。やはり、人の気配は無い。

「さあね」

私は答えた。

蒸し暑い夏の日差しの中にふたりきり。取り残されたかのような錯覚を見る。

以降、私たちがこのことについて言及することはなかった。その後も私たちの付き合いは最後まで続いた。そして、電話越しに彼女の死を知ったあの最後の日まで、私たちはこの関係を何と呼ぶべきなのか知らなかった。

何故だかはわからない。

ただあの夏の日。彼女は私の返事をきいて確かに、「よかった」と呟いたのだった。

水を貯めたせいで随分と重くなったバケツを持ち上げる。想像よりははるかに重くて、あの日軽々と持ち上げた彼女を想った。

この調子だと花束も一緒に持つていくのは罰当たりだろう。こんなところで花を盗むような罰当たりは居ない。墓地とここを往復する必要があるそうだ。

必死の思いでバケツを運びながら駐車場を横切る。階段を降りようと顔を上げるとそこには、黄色いテープが張り巡らされていた。

「なにこれ」

それはあまりにもこの場に不釣り合いな黄色であった。目を焼くほどの蛍光色はどこか浮いて見えた。

「すみませんねえ、今は立ち入り禁止なんですよ」

後ろから低くやわらかな、耳触りの良い声が聞こえた。振り返って見てみれば、困り顔の優しそうな男の人が立っていた。ジーンズにTシャツといったラフな格好だった。

「昨日の台風でね、そちらの崖が崩れてしましまして」

顔を上げて辺りを見渡した。今まで足元ばかりを見ていたからか、くらりと頭がゆれた。

墓地は土に埋まり、中にはひっくり返っているものもあった。

「そこの寺の住職をしているものなんですけれどもね。今朝お巡りさんが来ましてね。ちょっと詳しくはわからないんですけど、黄色いテープを貼ってドローン飛ばしたりしてるみたいでね」

見上げれば確かに、この場に似つかわしくない機械が、空を縦横無尽に飛んでいた。

「お参りですか？」

「はい、まあ」

「親族の方ですか？」

「いえ、身内ではないんですけど」

「お墓、大丈夫ですかね」

私はあの日の記憶をたどった。五段しかない石段を降り、駐車場から数えて五列、右か

ら三つ。

幸いにも土砂は流れ込んでいなかった。しかし、近くにあった高い石塔が倒れて、彼女の家の墓は下敷きになっていた。

私は静かに頭を振った。住職だと名乗った男はそっと、そうですかと返事をした。

「世の中には、何かが起こった後でないと気づけないことがどうしてもありますね。それが僕自身にとっては今回の崖崩れだったわけですけども」

では失礼しますとその男は帰っていった。

私は彼女の家族葬には参列しなかった。家族ではなかったから。事故の連絡を受けた時すでに彼女は息絶えていた。彼女が病院に搬送されたとき、私は家のソファでテレビを見ていた。彼女の帰りをただ、待っていた。

関係性に名前を付けなかったのは私たちだった。でもそれはきっと、私たちだけのせいじゃない。

私たちは家族にはなれない。生きている間も、死んだ後も。

昨日の台風の名残だろう。台風一過の晴れの朝、あの日綺麗に整列していた墓石は、もう見る影もない。風が強く吹いていた。

ぐちゃぐちゃになった墓地を眺めながら、私はただ、もう無意味になってしまった二つの花束のことだけが気になっていた。